機動戦士ガンダム　聖剣伝説　RED of MANA

EMICK

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖剣伝説４の世界観を使用して、ドラッグ・オン・ドラグーンな雰囲気を出しつつ、３人の機動戦士ガンダムの登場人物を使用した、オリジナル・クロスオーバー作品です。

登場人物の共通点は「赤いモビルスーツに乗る人」です。

目　次

登場人物紹介 ―――― 1
プロローグ　精霊会議 ―――― 3

登場人物紹介

登場人物紹介

シャア・アズナブル・・・ジオン公国の言わずと知れた「赤い彗星」。その正体はザビ家に謀殺されたジオン・ダイクンの息子・キャスバル・レム・ダイクン。レッドオブマナではマナの樹が眠る世界の島・イルージャ島で聖剣のはじまりの物語を紡ぐ。専用武器は「マナの剣」。専用ドラゴンはレッドドラゴンのラファエル。

ジョニー・ライデン・・・ジオン公国軍の「真紅の稲妻」と呼ばれるエースパイロット。明るく気さくで陽気な性格だが、内心・シャアに対して対抗意識がある。レムとは気が合うらしく「レムのおやじ」と尊敬の念を込めて彼を呼ぶ。イルージャ島で「勇者のナイフ」を手にした後、別行動しつつロリマー帝国との闘いに身を入れる。専用ドラゴンはブルードラゴンのガブリエル。

エリオット・レム・・・ジオン公国軍随一の技術士官。モビルスーツを産みだした天才技術者。ザクⅡＲシリーズ開発で有名な人物。性格は冷静沈着だが、意外に負けず嫌いで、固執する力においては彼に敵う者はいない。シャアとライデンの仲を取り持つ人物。唯一の既婚者。専用武器は「ゼロの剣」。専用ドラゴンはシルバードラゴンのミカエル。

エコール・・この物語の語り部で、マナの樹と聖剣の誕生の経緯を調査する研究員。理知的で理論家。メガネ美人。ただしレムからは「君と話していると調子が狂う」とも言われる。

リチア・・・大樹の巫女。彼ら三人を召喚した少女で、実はマナの女神となる女性。しかしある事件を境に正気を失い、邪なる精霊・タナトスを世界に解き放つ。

フィー・・・様々な魔法で彼らを援護する無垢なる精霊。世界を瞬時に移動でき彼ら三人の旅に同行する。

専用ドラゴンは男三人が一緒に乗るのも色気がないので考えてみました。

ミカエル・・・レムの相棒のシルバードラゴン。「竜と人は共存する

ことも時には必要･･との理由で彼の相棒になる。彼は「竜使いが荒い技術者」とレムのことを言うが、それを承知した上で彼と行動を共にする。

ガブリエル・・ライデンの相棒になるブルードラゴン。非常に男性らしい父性を感じさせる。人間を軽率な生き物と傍観しているが、ライデンの媚びを知らない性格が気に入っている。竜族としては珍しく水属性のブレスも吐くことが出来る。

ラファエル・・シャアの相棒となるレッドドラゴン。誇り高く苛烈なまでに自尊心が高い竜。だが、シャアの心にくすぶる復讐心に惹かれたのか共に行動する。凄まじい炎を吐く竜で戦場を業火で焼き払う。

武器説明

マナの剣・・・シャア専用。この物語の争点となる「はじまりの剣」。謎の道化師との戦いで剣が進化。マナの聖剣となる。植物を思わせる蔦が絡みついた非常に美しい装飾がされた剣。

勇者のナイフ・・ライデン専用。イルージャ島でライデンの手元に収まる小型の剣。持ち主の身体能力を飛躍的に向上させる力がある。

ゼロの剣・・・レム専用。イルージャ島でレムの手元に収まる、竜の牙から作られた白い長剣。レム自身の気持ちが昂ったり、恐怖を感じると、オーバーリミット状態になり、鬼神の強さを彼に与える。

ＣＯＭＭ・・・レムがこの世界で独自に開発した端末装置。いわば通信機で離れた人物との会話が出来る。世界に流れる魔力を元にした通信機器。

プロローグ　精霊会議

むかしむかし、まだ世界が平らかで人が魔法を知らなかった頃、なかつ海の真ん中に小さな島があった。
島の名はイルージャ。
その頃のファ・ディールには大きな国が５つあった。
砂の国・シャド。
水の国・トップル。
緑の国・ウェンデル。
火の国・イシュ。
そして、氷の国・ロリマー。
イルージャ島は、世界からは禁断の島として誰も近寄ろうとはしなかった。
島には大きな大樹があった。全ての生物の母とも呼ばれていた大樹だが、その樹は遥か昔にかけられた呪いに寄って石のようになり、もう何千年も沈黙を守ったままだった。
では、ここですべてのはじまりの物語を語るとしようか。
いかにして、三人の異邦人が聖なる剣を手に入れたか。
いかにして、マナの女神が生まれたか。
それは、我ら精霊と人と世界をつなぐ、長い長い絶望と希望の物語・・。
「まだ世界がたいらで人が魔法を知らないって、いつの時代の物語だ？おやじ？まるで自分で見てきたように語るんじゃねえよ？」
炎の精霊・サラマンダーが横槍を入れる。
「何だと!?この若造が！」
そこに土の精霊・ノームが短気になって怒り出す。
「おい。もめ事ならよそでやれ。時間がない」
闇の精霊・シェイドがそこで子供っぽい喧嘩を止めた。
「そうだよ。今夜は大事な精霊会議。この世界に現れたあの異邦人が残した足跡をたどるんだから」
風の精霊・ジンは空気に漂いながら、爽やかに言う。

「そうですよ。喧嘩は良くないですわ」
月の精霊・ルナも遠慮がちに喧嘩の仲裁をした。
「ええ。今夜は私達、八精霊が集まる大事な会議。彼らがこの地でどのように戦い、そしてどのように足跡を残したかを振り返る夜ですよ」
木の精霊・ドリアードはまとめに入る。
「ううむ。すまん。どうも年寄りは怒りっぽくなっていかんな」
「夜の時間は短い。早速、本題に入ろう」
「ええ。彼ら三人の赤い戦士たちの足跡をたどりましょう」
光の精霊・ウィスプがさりげなく先を促した。
「だから、あなたも途中で茶々を入れて話の腰を折らないこと。いいわね」
水の精霊・ウンディーネは、火の精霊に注意をした。
「ったくわかったよ。わかった！先の話をしてくれ。おやじ」
そこで、ノームによる、彼ら赤い三人の異邦人の話が始まった。
イルージャ島は、聖なる獣によって守られていると言われる平和な島だった。
そこにある村にとある少女が住んでいた。名をリチアという。
リチアという少女は大樹の巫女とも呼ばれていて、特別な力を持っていた。それはこの世界の者ではない、別の世界の人間を召喚する不思議な力だった。
大樹の巫女は夜、不思議な夢を見た。そして夢の中で誰かに命じられた。
『三人の力ある異邦人を導け。やがて、世界はこだまに支配される。深い闇を払う為に力ある魂を導け』
少女はその声が大事な予言と思い・・三人の異邦人をこの地に召喚した。
三人の異邦人は、ジオン公国と呼ばれる国の人間たちだった。
一人は、シャア・アズナブル。赤い彗星という異名を持つ、この物語の争点となる剣に選ばれし者だった。
一人は、ジョニー・ライデン。真紅の稲妻と呼ばれる、ジオンのトッ

プエースの一人。彼もまた、とある剣に選ばれし者。
そして、最後の一人は、エリオット・レム。ジオン公国随一の天才技術士官。そして彼もまた、ある剣に選ばれる者だった。
だが、彼らが召喚されても、敵はおろか、平和そのものの日々があるだけだった。
三人は当然、自分達の世界へ戻りたがる。
一見、平和そのもの。ただ何も起こらない平和な日々。しかし、脅威はすぐそこまで迫ってきていた。
リチアが住む村は「樹の民」と呼ばれる人々の村だった。
そして、三人の異邦人は、一見平和そうな日々を送る。この見知らぬ土地で。
爽やかな風が吹く、木々の下、シャアとレムはそれぞれ、その木陰で穏やかな表情を浮かべ、見知らぬ世界を見守る。
シャアの顔にはサングラス。服も赤いジオンの軍服。あの特徴的なヘルメットは被っていない。
金髪を風になびかせ、腕を組み木陰で、休んでいる。
レムもだ。彼もまたジオンの軍服姿で、特徴的な銀色の短髪を風になびかせ、どこか退屈そうに木陰で腕を組み、眩しい太陽の光に瞳を細めて、穏やかな表情を浮かべていた。
ライデンは、今はそのリチアと一緒に、リチアのペットである「プック」という生き物を追って、彼女と共に森の奥に行った。
ここでもライデンは持ち前の気さくな人柄を出して、そのリチアと一緒に森の中を散策していた。
「何の用だろうか？」
「全く、そうだな」
木陰で休む、赤い彗星と技術士官。二人は結構年齢は離れている。だが、お互いにそれぞれ尊敬はしあっていた。
「もうすぐ戦争が始まるというのに、何の用で呼び出されたのやら」
「さっさとサイド3に戻って、モビルスーツの開発をしたいな。さっきからアイデアが浮かんでいるのに」
「レム中佐は、根っからの技術士官ですな」

「まあね。元々、ジオニック社で働いていたから、いずれはこの軍服に袖を通すとは思っていたが」
「君も凄いよ。シャア君。元々の才能も凄いが、君の操縦テクニックは尊敬に値する」
「あなたもさすがですな。自分で開発したモビルスーツに乗って、データを収集する人物というのも凄い」
「彼はどう思うかな？」
「ライデンのことか。彼とは気が合いそうな気がする。モビルスーツの腕も悪くない」
　そのライデンは、森の奥へ、リチアと一緒にモンスターを追っていたら、そこで、明らかに敵意を持った連中を目撃した。
「リチア。何なんだ、奴らは？」
「あれは・・ロリマー王国・・！何で彼らがここに？」
「あれはどう見ても、仲良くしましょうって感じじゃないな。二人の下へ戻ろう」
「ええ」
　ライデンが見たのは、氷の国・ロリマーの軍団だった。
　戦車には、その国の王・ストラウドが乗っている。その周りには無数の兵隊が。
　ライデンは物々しい雰囲気の彼らを見て、悟る。そうか。要は俺達はこいつらと戦う為に呼び出されたのか、と。
　森の奥から戻ったライデンは、シャアとレムに報告した。
「シャア。レムのおやじ。どうやら、敵が来たようだぜ？」
「敵？」
「明らかに、この村に攻め込もうとしている。どうやら、あいつらと戦う為に、俺達は呼び出されたようだ」
「どういう奴らだった？」
「俺も判らない。だが、明らかに友好的な客じゃない」
「確か、ここは聖なる獣が守る島だと聞いた。まさか、その聖なる獣とやらに用があるのではないか？」
「リチア。その聖なる獣とやらは、今はどこにいるのだ？」

「あの森の奥の遺跡です。でも、そこには、もっと別の力が眠っています」
「別の力・・？」
「遺跡には、三振りの剣があるのです。何でも世界のはじまりから存在する剣だとか」
「むしろ、彼らはその剣を求めているのでは？」
「そう思った方が適切だろうな」
　彼らの推測は当たっていた。ロリマー帝国はその三振りの剣の内の一つ。マナの剣を求めていたのだ。
　程なく、彼らはいきなりロリマー帝国によって、大きな家に半ば強制的に押し込められ、制圧されたのだ。
　そこで、リチアと三人の異邦人は、先に遺跡に行き、その三振りの剣を確保することにした。
　ロリマー帝国の目を盗み、遺跡に侵入した彼らは、リチアの案内で、その遺跡へと脚を踏み入れた。
　だが、もうそこにはロリマー帝国の兵士たちが侵入していた。何かを調査しているらしい。
「何としても、剣を手に入れろ！」
　壁際に隠れて盗み聞きしていた彼らは、やはり・・と思う。
「さて、どうする？」
「リチア。裏道とかはないかな」
「確か、こっちに。着いてきてください」
「まさか、生身でこういう遺跡の探索するとは思わなかったよ」
「リチア。無理はするなよ。俺達のペースに合わせてくれればいいぜ」
「だいぶ、古い遺跡のようだな」
　そうして・・彼らは、遺跡の奥。大樹の力が眠る部屋に入った。
　そこには、確かに、三本の剣が地面に刺さっていた。
　そして、この三本の剣によって、彼らの長く苦しい苦難の旅が始まる・・。